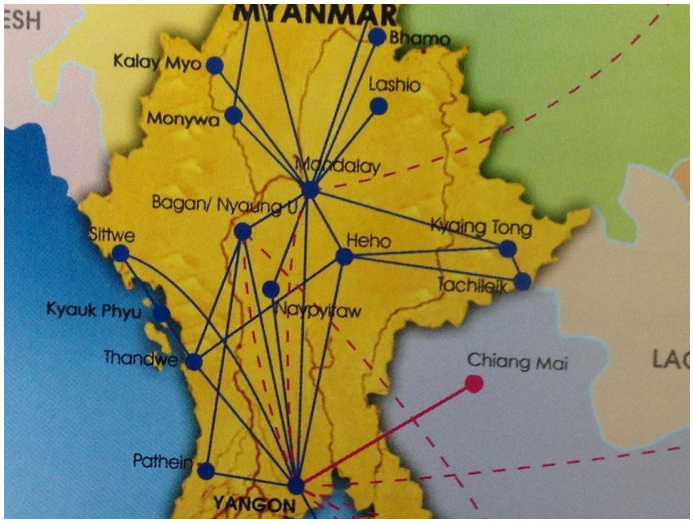
キンマについて（短報）

高松市議会議員　香川洋二

平成２５年８月２０日より２５日までバンコク及びミャンマー・バガンに政務調査に出かけた。調査内容はタイ国ではジェトロ・バンコク事務所で、タイ国における日本企業の現状ならびに東南アジアにおける経済現況の説明および市内における日本企業視察を行った。ミャンマーでは同国中央部に位置するバガンが高松市における伝統工芸品である蒟醤のルーツであることから同地の漆器生産現況を調査した。バガンへはバンコクから空路ヤンゴン（旧首都ラングーン）へ空路１時間半。また国内線で１時間半の位置にある。ちなみに現在はネピドが新首都となっている。バガンにおける訪問先は国立バガン漆芸技術大学で、同校副学長はじめ関係者からいろいろと説明を受けた。また、同地は２２１７の古寺遺跡が保存されており、インドネシアのボルボドール、カンボジアのアンコールワットと並び称される３大遺跡でもある。



今回のキンマの説明については、高松市ではキンマといえば漆芸品を連想するが、キンマという名称は植物としてのキンマに由来し、今回は①植物のキンマ　②嗜好品のキンマ　③漆器のキンマに分け説明する。

1）植物としてのキンマ

キンマ（蒟醤・学名 *Piper betle*）はコショウ科コショウ属の蔓性の常緑多年草で、ハート型のつやのある葉をつけ、高さ 1m ほど。白い花をつけるが目立たない。薬効のあるのは葉である。本来の分布地はマレーシアであるが、インド、インドネシア、スリランカでも自生。キンマの葉は精油を含み、有効成分の多くはアリルベンゼン化合物。

２）嗜好品としてのキンマ

ビンロウジ（檳榔・ビンロウヤシの種）を薄く切って乾燥させたものとキンマの葉に、水で溶いた石灰を塗り、これを口に含み噛む。噛んでいる間は渋みが広がり、大量に口中に溜まる唾はビンロウジの赤い色に変わる。飲み込まず頻繁に唾を吐き出す。ビンロウジには依存性がある。使用することでアルコールに酔った様な興奮を催す。石灰を含んでいるため赤くなった唾液と共に歯にこびりつき、歯が褐色に変色する。また、常習によってあごに変形をきたす。最近ではキンマ噛みを行なうことにより、口腔ガンが発生しやすくなることも報告されているが、これらの副作用は主にキンマよりもビンロウジといわれている。私が最初にキンマを見たのは今から２５年前マレーシアサバ州の田舎。台湾では現在嗜好が禁止されているが台南ではいまだ愛好者が多いと聞く。

画像上はバガン市内で見かけた露天商のキンマつくり。キンマに石灰を塗布後ビンロウジを乗せ包む。この露店では少量の蜂蜜を使用。下はキンマ愛好者の運転手。歯が茶色に変色・変形等が見られる。ヤンゴン駅でのキンマ売り。５個で２５円程度。

３）漆芸としてキンマ（蒟醤）

<u>嗜好品のキンマ</u>を入れる道具として発達した「キンマ」と呼ばれる盒子（ごうし・蓋のある器）漆器。高さ・直径１６ｃｍ。外蓋を外すと２段。一段目が石灰、二段目が乾燥したビンロウジ、広い底にキンマの葉を入れる。蓋や底にもデザインが施される。手に持っている椀は竹ひごに馬の毛を編みこんで漆器の素地とする馬毛籃胎漆器（まもう らんたいしっき）。弾力がある。キンマはバガン漆芸技術大学、馬毛籃胎漆器は地元漆器店にて購入。購入価格はキンマが 20,400 チャット（2,040 円）キンマは大きさと塗の回数により価格差があるがこのサイズが標準で 12 回塗り。高級品は 24 回塗りといわれ、購入したのは中級品。